コロナ禍の顧客接点拡大作戦

従来型見直し、各社各様に方策を

長引くコロナ禍の中で業界合同展示会やプロモーションの中止、縮小化が相次いでいるが、新しい技術や製品のプレゼンテーションや、見せて説明して理解を得るといった一連の商談活動は企業にとって非常に重要だ。従来の継続だけでは営業活動が満足に行えない今、新たな方法を模索しながら新規客獲得や顧客の囲い込みを目指す環境関連企業の取り組みを紹介する。

関西オートメイション

常設展示場を設置

営業の場、研修会場、スタジオと柔軟に活用

製造現場に欠かせないレベル計の開発・製造ほか、排ガス中のばいじん濃度を測定するダストモニター、ガス分析計などの環境機器を展開する関西オートメイションは、従来出展してきた展示会への参加を取りやめ、顧客へのプレゼンテーションや実験・検査用にと確保していたスペース（奈良県生駒市）に独自の常設展示ブースを設えた。

「レベル計も種類が増えてきているので、直接触って機器の動作や測定値表示を体感していただくことの重要性を感じており、常設の場が必要だと考えていた」（宮坂典央社長）。従来も顧客からの要望で、計量機器の使い方や確認方法をレクチャーする機会が多くあり、相手企業を訪問したり本社に招いたりしていたが、その都度準備してセッティングするより専用スペースがある方が便利だと算段していたそうで、コロナ禍が計画を後押しするタイミングとなった。

常設展示ブースの様子（上）と計測の様子が体感できるデモプラント

約150平方㍍の部屋の一角に設置された展示スペースにはLEDパネルが掲げられ、さまざまな機種のレベル計や排ガス流量計、ダストモニターなどが並び、スポットライトで照らされる様子は展示会場のブースそのもの。展示された製品は全て電源駆動しており、検知状態や計測値表示が体感できる。また前面には5種類のセンサ実機が取り付けられた小型のデモプラントを配置。樹脂ペレットを入れて見える化を図っており、フローセンサ、粉体流量計、水分計、レベルスイッチなどの稼働の様子が確認できる。

完成して間もない3月には日本粉体工業技術協会集じん分科会に場所を提供した。来場者10名のほか、リモートで30名が参加したハイブリッド会議形式で行われ、ダストモニター機器の紹介にとどまらず原理や機能の説明や性能評価事例に関する講演などが行われた。

「ダストモニターに関してはJIS規格化に向けて勉強会を開く機会も増える。社内外の関係者の研修の場として活用していきたい。ダストモニターを扱うに当たり、適合検査や基準値の測定などは現状、大阪府立環境農林水産総合研究所内のプラントで行っているが、将来的にはここでも行えるよう研究・実証プラントを作ることも視野に入れている」と宮坂社長。ダストモニターも簡易型からハイスペックの機種までラインアップを増やし、顧客の前で実証して理解を得る販売スタイルを進めたいとしている。

とりあえず第1段階的には完成した同展示場だが、2階建てで延べ床面積1350平方㍍と、スペースはふんだんにある。増設やブラッシュアップを図ってブランド価値向上のための機能を充実させていく計画で、まずは2階に日本代理店として取り扱うブランドごとに専用の展示ブースを設置する予定。「社内外のトレーニングの場として、またプラントメーカーの新入研修や勉強会の場として活用してもらうよう提案を行っていく」

また、「バーチャルより実機を見せる方が分かりやすい。対面し会話をすることで次の提案にもつながる」とリアルな展示場の重要性を認識する一方で、ウェブ展示会の必要性や便利性も評価している宮坂社長は、Zoomを使った営業も積極的に行っていく構え。「社内のデスクでは難しいが、この常設展示場であれば実機を使いながら数値の合わせ方などの実演をするなど、対面同様の対応ができる。そのほか、製品紹介などを発信するスタジオとして使うなど、柔軟に活用していきたい」